

4 発生予察情報の発表

(1) 情報(警報、注意報、特殊報)の内容

情報の種類	発表月日	対象作物	対象病害虫	情報内容																							
警報	9月4日	水稻	トビロウカ	<p>1. 発生地域(対象地域) 県内全域</p> <p>2. 発生程度 多</p> <p>3. 注意報発令の根拠</p> <p>(1) 8月下旬の巡回調査(72筆)の結果、発生圃場率は81.9%(平年31.5%)、株当たり虫数は2.1頭(平年0.2頭)と非常に多かった(図1, 図2)。坪枯れが多発した平成21年、24年よりも虫数の増加が早く、株当たり虫数、発生圃場率ともに過去10か年で最も高かった。特に早植え圃場での密度が高かった。また、8月下旬の要防除水準である株当たり1頭を越える圃場も多くみられた。(表1)</p> <div style="text-align: center;"> <p>図1 発生圃場率の推移</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>図2 1株あたり虫数の推移</p> </div> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">発生程度</th> <th colspan="5">トビロウカの株当たり虫数</th> </tr> <tr> <th>0</th> <th>0~1未満</th> <th>1~5未満</th> <th>5~20未満</th> <th>20~</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>圃場数</td> <td>13</td> <td>41</td> <td>11</td> <td>4</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>(圃場率%)</td> <td>(18.1)</td> <td>(56.9)</td> <td>(15.2)</td> <td>(5.6)</td> <td>(4.2)</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 8月6半旬(8月26日)の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、株当たり虫数は7.7頭(過去7ヵ年平均0.9頭)で、成虫および中齢幼虫主体であった。寄生株率は100%(過去7ヵ年平均39.2%)であった。また、増殖力の高い短翅雌率が91.1%であった。</p> <p>(3) 坪枯れの発生も各地で確認され始めている。</p> <p>(4) 平成25年8月30日発表の1か月予報によると、向こう1か月の気温は平年並または高い見込みであり、本虫の発生に好適である。</p> <p>4. 防除対策</p> <p>(1) 9月上中旬に株当たり成虫・老齢幼虫を5頭以上認めたら早急に防除する。</p> <p>(2) 本虫の発生は圃場間や同一圃場内でも偏りが大きい。このため、防除を行った圃場でもその後の発生状況に十分注意し、防除効果の確認を行うとともに必要に応じて追加防除を行う。</p> <p>(3) 本虫は株元を好んで寄生するので、薬剤散布は株元に薬剤が十分に付着するよう丁寧に行う。</p> <p>(4) すでに坪枯れが発生している圃場では被害の拡大を防ぐため早急に防除する。また、多発生圃場で水稻が収穫可能な時期に達している場合はできるだけ早めに刈り取る。</p> <p>(5) 収穫時期が近いので、薬剤の散布時期に注意し使用基準を厳守する。また、周辺環境を十分に確認し、ミツバチも含め周辺動植物等への飛散などによる影響がないよう十分注意する。</p>	発生程度	トビロウカの株当たり虫数					0	0~1未満	1~5未満	5~20未満	20~	圃場数	13	41	11	4	3	(圃場率%)	(18.1)	(56.9)	(15.2)	(5.6)	(4.2)
発生程度	トビロウカの株当たり虫数																										
	0	0~1未満	1~5未満	5~20未満	20~																						
圃場数	13	41	11	4	3																						
(圃場率%)	(18.1)	(56.9)	(15.2)	(5.6)	(4.2)																						

注意報	8月19日	水稻	トビイロウンカ	<p>1. 発生地域(対象地域) 県内全域</p> <p>2. 発生程度 多</p> <p>3. 注意報発令の根拠</p> <p>(1) 8月上旬の巡回調査(89筆)の結果、株当たり虫数は0.8頭(平年0.06頭)、発生圃場率は53.9%(平年27.3%)と平年より多かった(図1、図2)。坪枯れが多発した平成24年よりも虫数の増加が早く、株当たり虫数、発生圃場率ともに過去10か年で最も高かった。特に早植え圃場での密度が高かった。</p> <p>(2) 8月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、株当たり虫数は3.1頭(平年0.2頭)、寄生株率は88.0%(平年16.4%)であった。</p> <p>(3) 向こう1か月の気温は高い見込みであり本虫の発生に好適である。</p> <div data-bbox="699 589 1125 831" data-label="Figure"> <table border="1"> <caption>図1 1株あたり虫数の推移</caption> <thead> <tr> <th>時期</th> <th>H25 (頭)</th> <th>H24 (頭)</th> <th>平年 (頭)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>6月前</td><td>0.0</td><td>0.0</td><td>0.0</td></tr> <tr><td>6月後</td><td>0.0</td><td>0.0</td><td>0.0</td></tr> <tr><td>7月前</td><td>0.0</td><td>0.0</td><td>0.0</td></tr> <tr><td>7月後</td><td>0.0</td><td>0.0</td><td>0.0</td></tr> <tr><td>8月前</td><td>0.1</td><td>0.0</td><td>0.0</td></tr> <tr><td>8月後</td><td>0.2</td><td>0.0</td><td>0.0</td></tr> <tr><td>9月前</td><td>0.5</td><td>0.0</td><td>0.0</td></tr> <tr><td>9月後</td><td>0.8</td><td>0.0</td><td>0.0</td></tr> </tbody> </table> </div> <div data-bbox="699 891 1125 1133" data-label="Figure"> <table border="1"> <caption>図2 発生圃場率の推移</caption> <thead> <tr> <th>時期</th> <th>H25 (%)</th> <th>H24 (%)</th> <th>平年 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>6月前</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr> <tr><td>6月後</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr> <tr><td>7月前</td><td>10</td><td>0</td><td>0</td></tr> <tr><td>7月後</td><td>25</td><td>5</td><td>5</td></tr> <tr><td>8月前</td><td>55</td><td>15</td><td>10</td></tr> <tr><td>8月後</td><td>45</td><td>40</td><td>25</td></tr> <tr><td>9月前</td><td>65</td><td>65</td><td>45</td></tr> <tr><td>9月後</td><td>54</td><td>88</td><td>27</td></tr> </tbody> </table> </div> <p>図1 1株あたり虫数の推移</p> <p>図2 発生圃場率の推移</p> <p>4. 防除対策</p> <p>(1) 本虫の発生は圃場間や同一圃場内でも偏りがあるので圃場の見回りを徹底し、できるだけ圃場全体の発生状況の把握に努め、防除を行う。また、今後の発生予測は図のとおりであるが、地域や圃場により発生状況が異なることがあるので、それぞれの圃場における発生状況を把握した上で防除を行う。</p> <p>(2) 8月下旬の要防除水準は株当たり虫数が1頭以上である。</p> <p>(3) 防除実施後もその後の発生状況に十分注意し、防除効果の確認を行うとともに必要に応じて追加防除を行う。</p> <p>(4) 本虫は株元に好んで寄生するので、農薬散布は株元に薬剤が十分付着するよう丁寧に行う。</p>	時期	H25 (頭)	H24 (頭)	平年 (頭)	6月前	0.0	0.0	0.0	6月後	0.0	0.0	0.0	7月前	0.0	0.0	0.0	7月後	0.0	0.0	0.0	8月前	0.1	0.0	0.0	8月後	0.2	0.0	0.0	9月前	0.5	0.0	0.0	9月後	0.8	0.0	0.0	時期	H25 (%)	H24 (%)	平年 (%)	6月前	0	0	0	6月後	0	0	0	7月前	10	0	0	7月後	25	5	5	8月前	55	15	10	8月後	45	40	25	9月前	65	65	45	9月後	54	88	27
時期	H25 (頭)	H24 (頭)	平年 (頭)																																																																									
6月前	0.0	0.0	0.0																																																																									
6月後	0.0	0.0	0.0																																																																									
7月前	0.0	0.0	0.0																																																																									
7月後	0.0	0.0	0.0																																																																									
8月前	0.1	0.0	0.0																																																																									
8月後	0.2	0.0	0.0																																																																									
9月前	0.5	0.0	0.0																																																																									
9月後	0.8	0.0	0.0																																																																									
時期	H25 (%)	H24 (%)	平年 (%)																																																																									
6月前	0	0	0																																																																									
6月後	0	0	0																																																																									
7月前	10	0	0																																																																									
7月後	25	5	5																																																																									
8月前	55	15	10																																																																									
8月後	45	40	25																																																																									
9月前	65	65	45																																																																									
9月後	54	88	27																																																																									

注意報 3月18日 たまねぎ べと病

1. 発生地域(対象地域) 県内全域
2. 発生程度 やや多
3. 注意報発令の根拠

(1) 3月上旬の巡回調査(15筆)の結果、発病株率は0.3%(平年0.1%)、発生圃場率は6.7%(平年5.0%)と平年よりやや多い発生であった(図1、2)。
(2) 3月17日に県央地域で行った調査(22筆)の結果、発病株率は8.7%、発生圃場率は50.0%と多い発生であった。

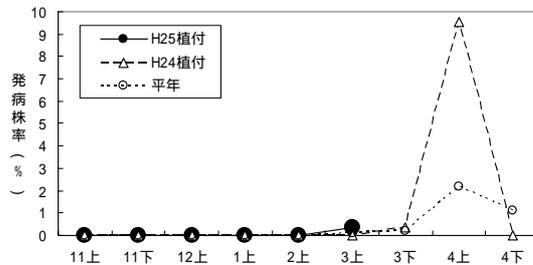


図1 べと病発病株率の推移

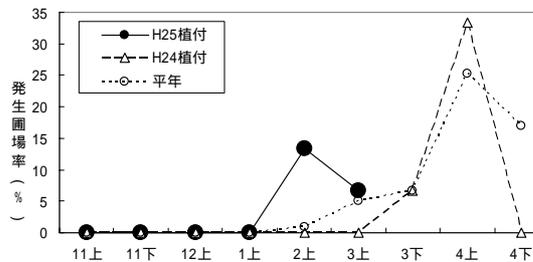


図2 べと病発生圃場率の推移

4. 防除対策

- (1) 病勢が進行すると防除困難となるので圃場の見回りをこまめに行い、早期発見・早期防除に努める。
- (2) 薬剤耐性発達防止のため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 罹病葉や枯死葉は伝染源となるので適切に処分する。

特殊報	1月8日	ばれいしょ	ミツコピナミハダニ	<p>1 病害虫名 ミツコピナミハダニ (<i>Tetranychus evansi</i> Baker & Pritchard)</p> <p>2 発生物 ばれいしょ</p> <p>3 発生場所 諫早市</p> <p>4 発生確認の経過 平成25年11月上旬に秋作ばれいしょにおいて、ナミハダニ赤色型に類似したハダニ類の多数の寄生(写真1、2)と葉の白化症状が認められ、地上部が枯死した株も散見された(写真3)。ハダニ類を採集し、茨城大学農学部の後藤哲雄博士に同定を依頼したところ、ミツコピナミハダニであると同定された。本種の本県ばれいしょにおける発生確認は初めてである。なお、現在のところ発生を確認しているのは1圃場(15a)のみである。 本種は国内では、平成13年に大阪府及び京都府のイヌホオズキで初めて発見され、本県でも平成21年に長崎市のイヌホオズキで初めて確認されている。その他、現在までに兵庫県、東京都、福岡県、鹿児島県、高知県、沖縄県及び奈良県のナス科植物で発生が確認されている。</p> <p>5 形態および生態等 (1)本種の体長及び体色は、雌成虫が0.6mm程度でくすんだ橙色～濃橙色、雄成虫が0.47mm内外で白～淡橙色である。休眠性は示さず、ナミハダニ (<i>Tetranychus</i>) 属の中でも非常に高い増殖力を有する。本種は主に葉裏に寄生し、初め寄生部位の葉に小さい白色斑点を生じさせるが、寄生密度が非常に高くなると葉を白化させるため、植物は枯死する場合もある。 (2)寄主植物は、ばれいしょ、トマト、ミニトマト、なす、ピーマン、トウガラシ、パプリカ、ホオズキ、イヌホオズキ、ワルナスビ、テリミノイヌホオズキなどであり、ナス科植物に特化している。</p> <p>6 防除対策 (1)圃場周辺のナス科植物は発生源となる可能性があるため除草に努め、それらの植物での発生に注意し、ばれいしょ圃場への侵入を防ぐ。 (2)ばれいしょには、ハダニ類対象にルピトックス乳剤の登録がある。いも類のハダニ類対象には、気門封鎖型殺虫剤のアカリタッチ乳剤の登録があり、ある程度の殺成虫効果が認められている。 (3)トマト、ミニトマト、なす、ピーマンにも寄生するので、これらの作物における発生にも注意する。なお、これらの作物に登録のある一般的な殺ダニ剤の効果は高いとされている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div data-bbox="635 1489 997 1758" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1034 1489 1401 1758" data-label="Image"> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="715 1787 933 1818" data-label="Caption">ミツコピナミハダニ雌成虫</div> <div data-bbox="1136 1787 1241 1818" data-label="Caption">寄生状況</div> </div>
-----	------	-------	-----------	---